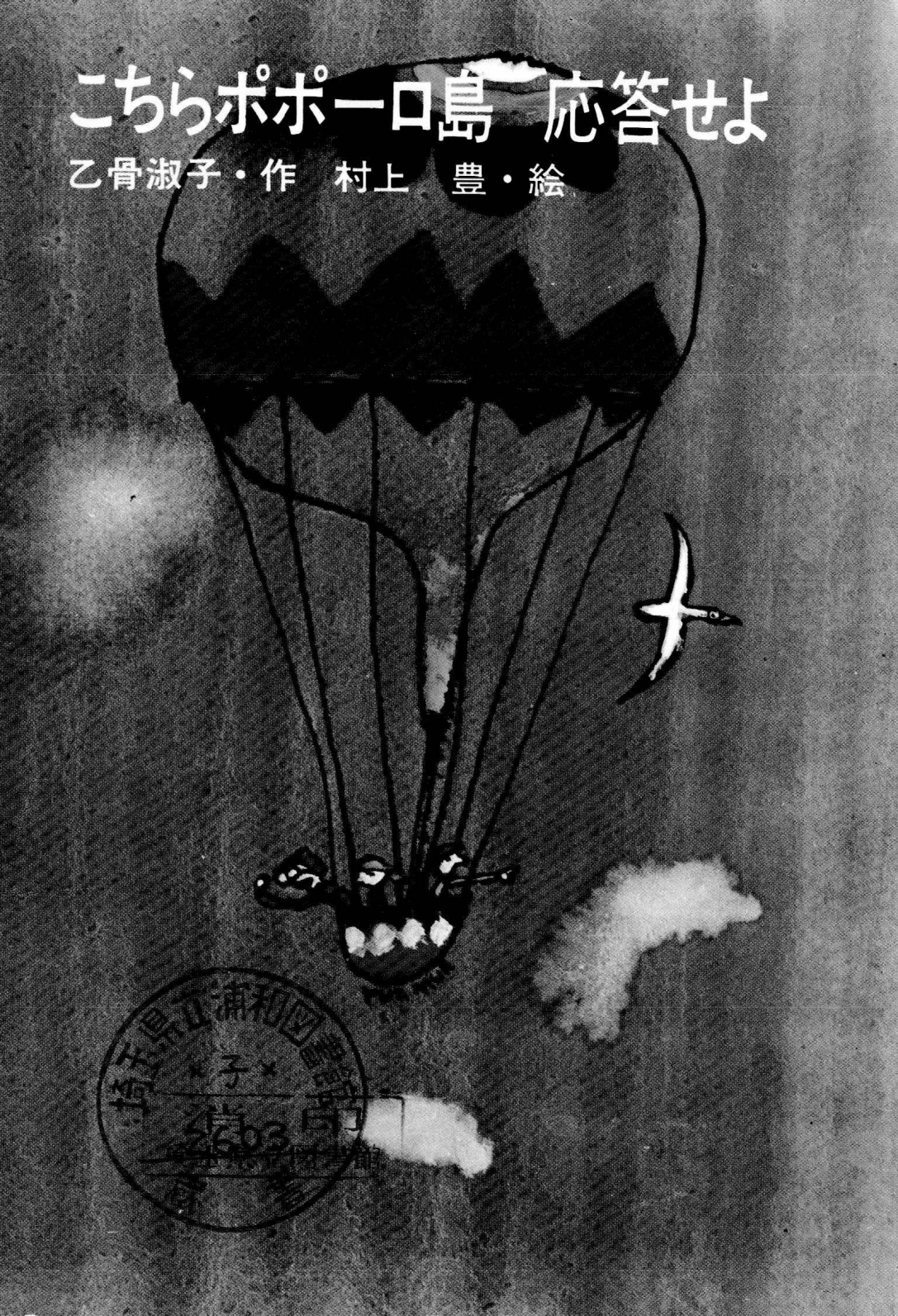
こちらポポーロ島　応答せよ

こちらポポーロ島　応答せよ

乙骨淑子・作　村上　豊・絵



埼玉県立浦和図書館
＊子＊
2603

913.6	おっ	こつ よし こ
	乙	骨淑子作 こちらポポーロ島 応答せよ 太平出版社 1970 P178 22cm ¥.680

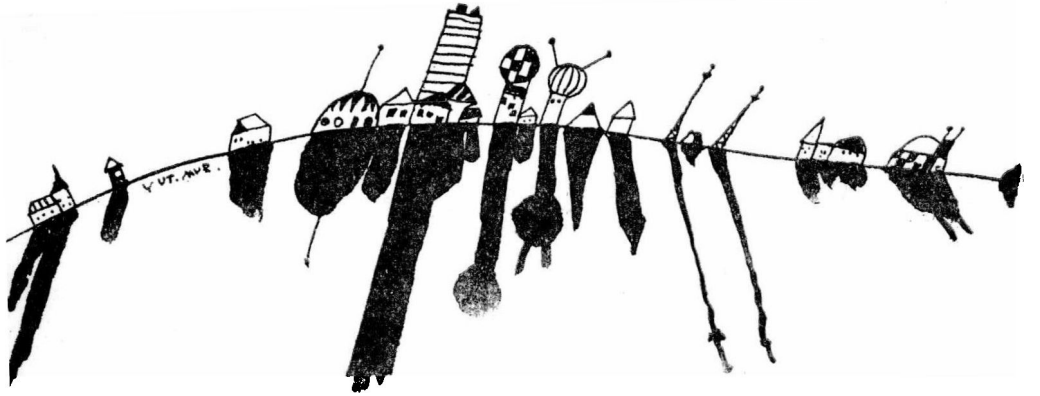
こちらポポーロ島
応答せよ　母と子の図書室　56—2

1970年9月25日　第1刷発行　¥ 680

著者　乙骨淑子
発行者　崔容徳

発行所　東京都千代田区西神田1-2-15　石合ビル
株式会社　太平出版社 ©
振替東京99563　TEL291-9744・9752　294-7083

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　道野整版・加藤印刷・双葉印刷



―ポポーロ国って、ほんとうにあるの？

―あるにきまっているじゃない？

―ぼくたちでも、ゆけるの？

―ゆけるとも。

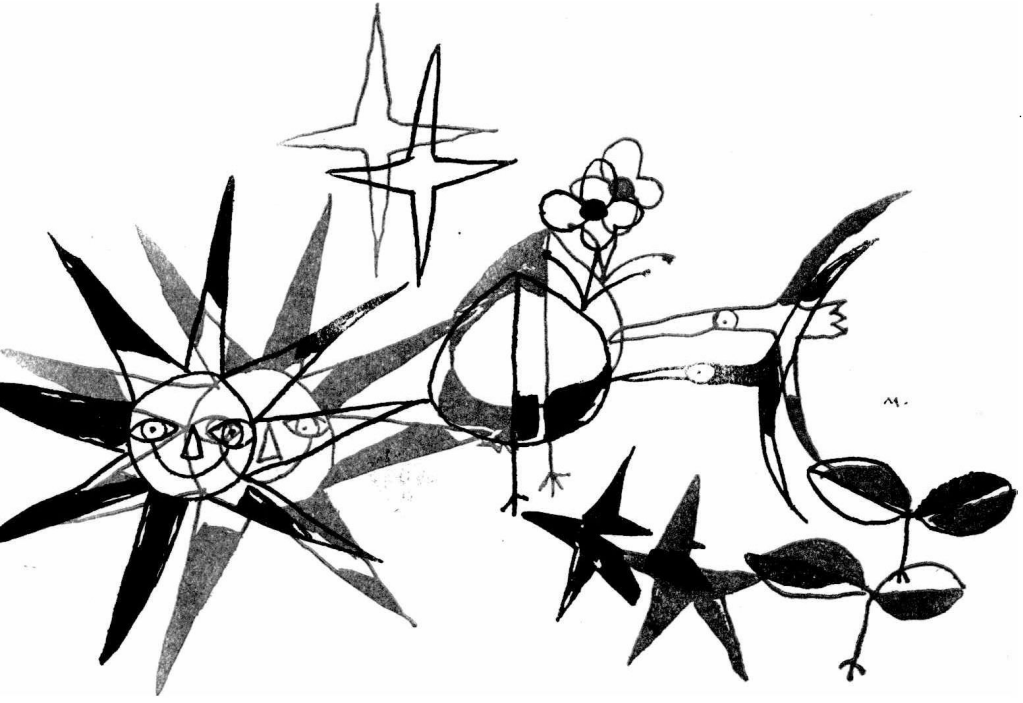
―でも、それは、未来の国のことでしょ。

―ううん、未来じゃないよ。今のことなんだ。

こちらポポーロ島 応答せよ

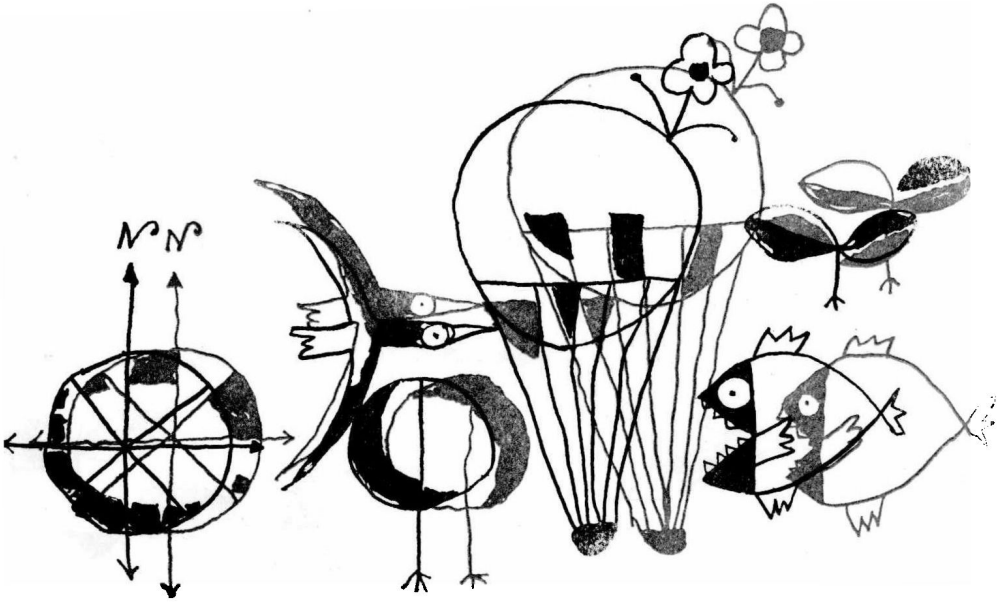
作 乙骨淑子
絵 村上豊

第一部 ヤマトウ国へ……14
1 テングがでた……14
2 消えたテング……21
3 洞窟の中……26
4 小さな火花……33
5 すっぽんのぼん太……38
6 トド先生の発明……41

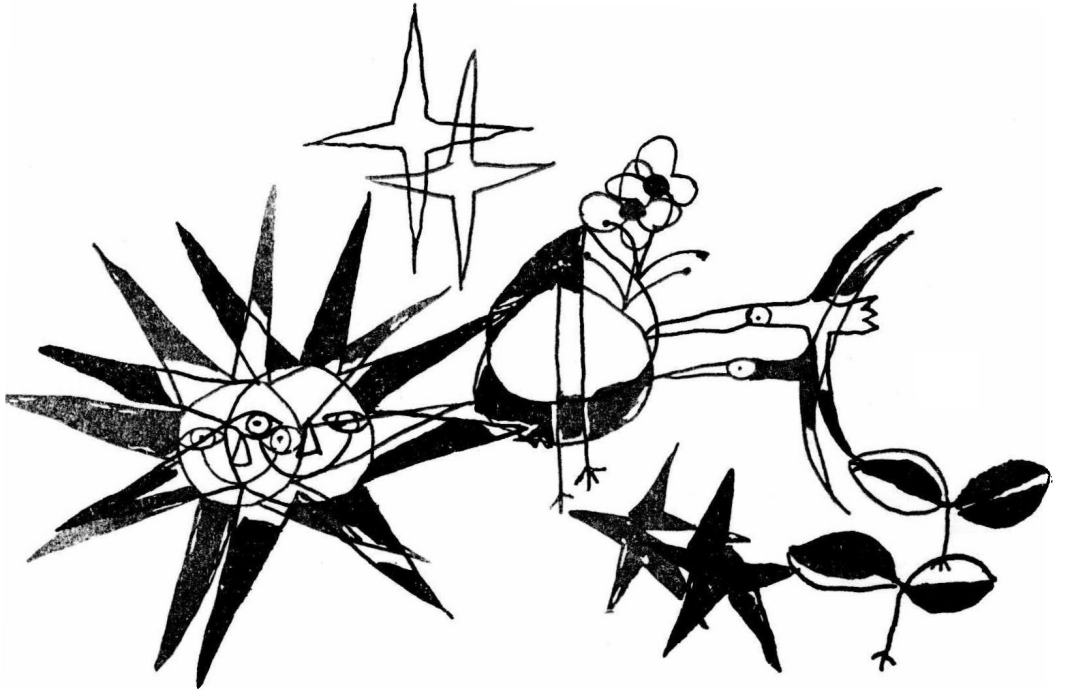


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

7 音のする石……45
8 ポポーロ国からの人……51
9 いなくなったトド先生……55
10 追跡車……60
11 白いパトカー……66
12 だれもいない洞窟……70
13 京上旅館……74
14 山んばのモコ……82
15 渓流のほとりで……85
第二部 ポポーロ国へ……91
16 出発……91



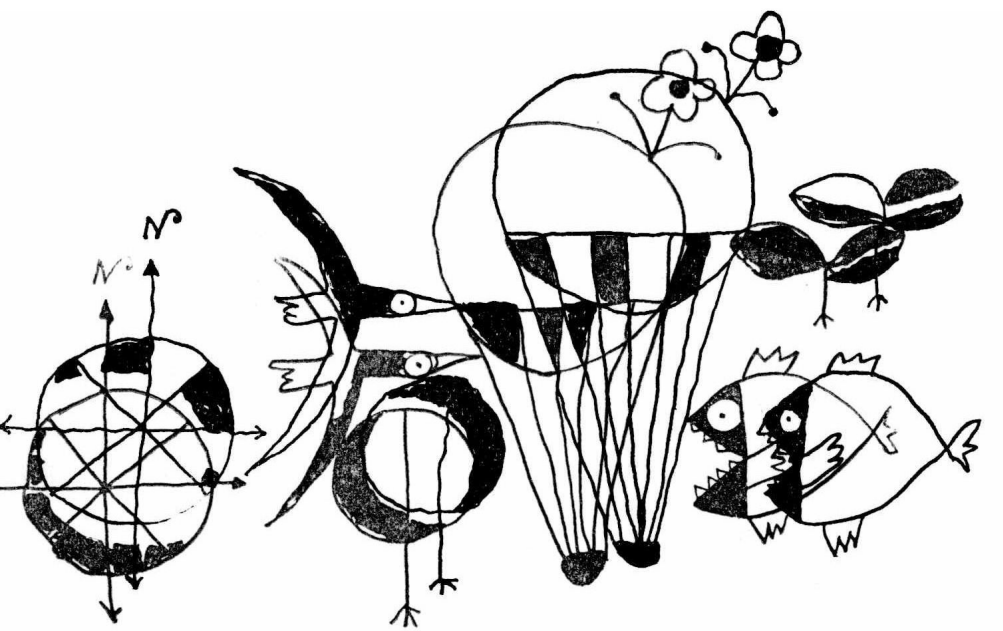
17 ポポーロ国入口……95
18 銀色のもぐら号……100
19 オレンジ色の炎……106
20 ポポーロ国空港……112
21 アゴラ……120
22 タコぼうず号……125
23 夜の港……130
24 サンゴ礁の島……135
25 焼けおちたヤマトウ国……139
26 松林の中の廃園……144
27 再会……149



28 無人島へ……154
29 白い雲……158
30 破壊計画……163
31 こちらポポーロ島 応答せよ……168

母と子の図書室によせて
木下順二……6
作者 乙骨さんのこと……12
画家 村上さんのこと……12
作者のあとがき……172
画家のあとがき……173

制作＝崔容徳　編集＝浅田始那



作者 乙骨淑子さんのこと

乙骨淑子さんは日本式の美人で、手ぬぐいをあねさまかぶりにして、ハタキでももたせたら、とてもかいがいしく、しとやかに見えそうです。でも、現実の乙骨さんは、そとから見たより、ずっと気骨が（あるいは、しんのつよさが）あって、女性ながら、とてもたのもしい人です。

『こだま』という同人誌の世話役を、長年ひきうけてやっていますし、その雑誌に発表した長編『ぴいちゃぁしゃん』と『八月の太陽を』は、乙骨さんの代表作といえるものです。

こんどの作品をかくため、乙骨さんが四国へ取材旅行に出かけたのは、もうずいぶんとまえのことでした。彼女の新境地を開いた作品として大いに期待しています。

（いぬい　とみこ）

画家 村上 豊さんのこと

村上さんはわたくしよりずいぶん若い。若いけれども、いつもそのかく絵が、すぐれて美しい。

たいへんりっぱな才能のもち主だと、かんしんしている。

だれにでもわかって、だれにでも好かれる、新しい美しさを絵にできるのはりっぱなことだ。

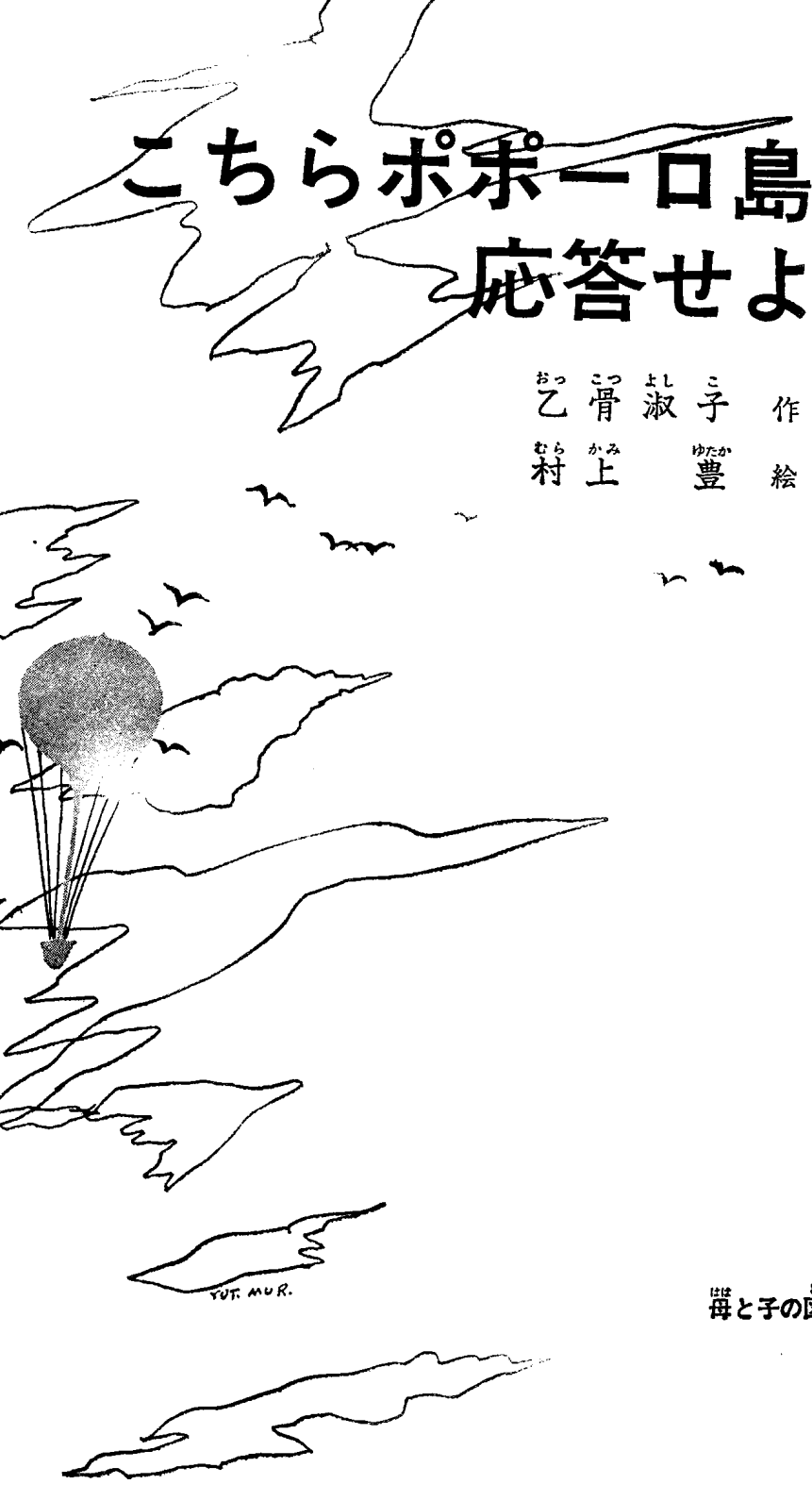
そして、そのかく絵のなかに、ただ美しいだけでなく、なにかあたたかいものが、かくされている、とわたくしは思っている。

わたくしにとっては、遠くすぎさったとだけれど、おかあさんに抱かれてきいていた、子守唄のような、春のそよ風のような、きもちのいいあたたかさが……。

（岩田専太郎）

こちらポポーロ島
応答せよ

乙骨淑子 作
村上　豊 絵



母と子の図書室

第一部　ヤマトウ国へ

1　テングがでた

とつぜん、頭の上で、木々のざわめきがおこった。ぼくは、顔をあげた。その時、黒いかげが、さあっと枝をたわわせて、消えてゆくのを、ぼくはみた。あつぼったいクマ杉の緑の葉が、朝のひかりをとびちらすようにゆれた。

「どうかしたんかあー。」

ぼくの息づかいを感じたのか、先を歩いていたトド先生がふりかえった。大きな顔を重そうに、ねむそうにこちらをむく。こうした時の先生の目は、まさにそのあだ名のごとく、巨大なオットセイににた、あのトドのあどけない目そのものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「へんなものをみたんだよ先生。鳥みたいで、クマみたいなやつがさあー。」
「空をゆく天馬じゃなくて、天クマをみたか。そいつあ、ゆかいだ。」
トド先生は、腹をつきだすようにして笑った。
四国山脈の一つ、天狗塚へのぼる者は、ほとんどいない。ことに久保からいざり峠への道は、道らしい道もなく、カヤをかきわけて、はうようにして、すすまなくてはならない。炭焼きにはいる者もいないといわれている。
五月はじめ、雑木林は芽ぶきはじめていた。行く手をさえぎるように、ぼくの目の前に小枝が、おおいかぶさってくる。ぼくは、なにげなく、その小枝をとると目の前にもってきた。枝の先についている芽は、霜をふいたように、うすべに色にふくらんでいた。ぼくは、ふうっと息をすいこんだ。ぼくは、銀色にひかる芽をみながら、転勤もわるくなかったなと思った。土讃線池田駅からバスで一時間、さらにそこからタクシーにのって一時間あまりはいった山の中にある水力発電所へ転勤ときまった時、ずいぶんと上役をうらんだものだ。なにしろ、高校を卒業してたった一か月しかつとめていなかったのだ。でもその時は、まさかここに、こんな美しい山があるとは思わなかったし、トド先生のようなお医者さんと知りあいになるとは思わなかったからだ。
その時、ふたたび、ぼくのうしろでカヤのはげしくすれあう音がおこった。ぼくはふりかえった。カヤの葉のゆれがのこっていなかったら、ぼくはなにもみなかったと思ったかもしれない。だが、

ぼくはやはりみてしまったのだ。さあッーとカヤの中に消えていったひとすじの黒いかげを。ぼくは、トド先生にたしかめた。

「先生、今、音したね。」

「音？　音なんかしないよ。」

トド先生は、のんびりと答えると、ひろい肩をゆらして、およぐようにカヤをかきわける。

≪カモシカかな。だが、さっきは木の上だったな。妙だな。なんだろう。≫

ぼくは、こだわっていたが、やがて胸をつきあげるような、けわしい山道に、心はうばわれていった。ぼくは、早く天狗塚へのぼりたかった。今日のように天気がよければ瀬戸内海や中国地方の山々がみえるし、南には太平洋、北にはまだ残雪をのこした祖谷山の峯がみえるにちがいない。新緑にはえた残雪の山々は、目がさめるように、美しいにちがいない。

山道は、やがてシイ、カシの木立がつづきはじめ、おおいかぶさるようにしげった葉が、日のひかりをさえぎった。小鳥たちは、ぼくたちの足音に逃げようともしない。人間の足音など、きいたことがないからかもしれない。

「おい、ありゃ、煙だなあー。」

とつぜん、トド先生は立ちどまった。先生が指さすほうに、たしかにうっすらと、紫の煙がみえる。

「先生、下に小屋がみえる。」
ぼくは元気づいて声をはりあげる。そして、先にたって歩きはじめた。やがて、ぼくは大きな、ツガの木の下にたつ炭焼き小屋の前に立った。ぼくは、かたむきかかった小屋の戸をおした。なかなかあかない。おすたびに、小屋がたおれそうに、がたぴしとゆれる。
「どなん、したぞい。」
戸が中からあいた。うおおーんと、おしよせてきた煙とともに、腰のまがった老人が立っていた。
「すこし、やすませてくれないかなあー。」
トド先生が、煙に目をしばたたかせていった。
「よう、きんなさったのう。」
おどおどと、老人はぼくたちをみあげる。
「わしゃ、マノモンが、きよったとおもうたぞい。」
老人は、まだおちつかぬようすで、ふたりをみた。
「マノモン？　いやだなあー　おれたち、お化けじゃ

ないよ、おじいさん、ほれ、このとおり足がある。」
トド先生は、口をとんがらして、まじめくさっていう。老人も、まけずにいう。
「じゃがな、ここんところ、ようけマノモンが、でよるんじゃ。西山でも、ケシボウズ（赤ん坊のお化け）が、でたじゃとよ。ゴンギアナキ（赤ん坊の泣き声）をきいた者がおるで。」
「まさかー。」
ぼくと先生は、顔をみあわせて、なんとなく笑った。
「あにさん、あんたら、ほんきにせんな。そげん顔するなら、ええことおしえてつかわそ。」
老人は声をおとすと、そっとあたりをうかがった。
「この山にはな、テングがいるぞい。」
「テング?!」
とつぜんトド先生が、けたたましく笑った。
「こりゃ、ゆかいだ。四つんばいになってのぼってきたかいがあったというもんだ。おじいさん、きかせてくださいよ。」
「あんた、そげ笑うことじゃ、なきゃー。」
老人は、トド先生をにらむようにみすえた。
「わしは、きのうもきいたぞい。かきん、かきんと、おのの音がするんじゃ。つづいてばりばりば

りと木がたおれる音じゃ。わしは小屋をとびでて、みにいった。だがな、なぁーんにも、かわったことはなか、木をきったあとなんぞないんじゃ。こりゃ、テングさまのしわざにちがいねえぞい。」

「そんなことないよ。」

「ま、さきをききなさあれ。」

老人は、トド先生のことばをおさえて、つづけた。

「こりゃ、テングだおしにちげえねえと、わしは、テングさまの好物のみそつき餅を串ざしにして、小屋の外へおいておいたんじゃ。」

「それで？」

ぼくは、からだをのりだして、老人のはなしに耳をかたむけた。

「ねえんじゃ。だして五分とたたぬまに、餅はなくのうとるんじゃー。」

「でも、テングがとったとは、かぎらないよ、おじいさん。」

「テングさまじゃぞい！」

トド先生のことばに、老人は、いぎをただすようにして、きっぱりといった。

小屋をでてからも、トド先生はひとりでにやにや笑っている。まもなく二十一世紀がくるというのに、テングがいるとおもいつめている老人が、先生にはたまらなく、おかしいらしい。

昼ちかく、ぼくたちは四国笹の上に腰をおろし、べんとうをひろげた。

「おい、あすこに、きいちごがあるぞ。」
トド先生は、みがるに立ちあがると、とりにでかけた。
ぼくは、職員食堂のおばさんが作ってくれたおむすびを口に入れた。「いやだねえ。時間外労働だよッ」と、ぶつぶつもんくをいいながら、おばさんは、のりをたくさんまき、中にタラコを入れてくれた。のりのかおりが口にひろがる。
と、その時、ばりっ、ばりっ、と木々の枝をかきわける音が、頭の上でおこった。上をふりむいたぼくは、
「うッーッ。」
と、からだを前におしまげた。おむすびがのどにつまったのだが、しかし、それだけではない。ぼくは、木の上で、じっとこっちをみているテングと目がぴったりとあったのだ。テングは、はずかしそうに、目をふせると、
「ウッー　ウッー　ウッー。」
と、声をあげて、またたくまに枝をゆりうごかして、姿をけしていった。ぼくは、つばをごくりんと、のみこむ。夢ではない。ぼくはたしかにみたのだ。おおいかぶさるような髪の毛。そしてそのあいだからかいまみえた鼻、消えてゆく時にひろげた、白ずんだ着物。
「おい、どうした？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com